

韓国文人訪問インタビューの私的記録

白川, 豊
九州産業大学 : 名誉教授

<https://hdl.handle.net/2324/7162115>

出版情報 : 韓国研究センター年報. 23, pp.7-20, 2023-03-20. Research Center for Korean Studies, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :



韓国文人訪問インタビューの私的記録

白 川 豊*

はじめに

筆者は1979年3月から1985年3月まで約6年間、韓国に留学した経験があるのだが、その間に試みた元老文人を中心とする訪問インタビュー時のメモなどをもとにこれを活字化しておくことによって今後の文人研究にいささかなりとも参考資料として役立つことを期待して拙文を記すことにする。

そもそもの経緯を簡略に示すと、筆者より先に韓国に滞在していた鴻農映二氏が同じ留学先（東国大）で、また近現代文学専攻者でもあることから知り合い、同氏の提案でそれまであまりなされたと聞いたことのない元老文人の訪問インタビューをやってみることになった。なるべく高齢の文人から順に得難い話を聞いておくことの貴重さは言うまでもないことだった。しかし、ただの日本からの外国人学生であった我々にそうやすやすと会ってくれるとは思えなかった。そこで筆者は、著名な評論家でもあり大学院の指導教授であった趙演鉉先生にダメ元で頼み込んだところ、案外、気軽に応じてくださり、文人に電話を掛けたり紹介状を書いてくれたりしてくれたのだった。その後、やはり大学院での講義を聴講していた有名な詩人でもある徐廷柱先生にもお願いして紹介の労を取っていただいた。すでに故人となられたお二人の先生方のご高配にあらためて敬意を表したいと思う。

参加者としてはその後、すでにソウル大で碩士課程を終え、世宗大で助教授をしておられた筆者らの

先輩にあたる芹川哲世氏にも呼び掛けたのをきっかけとして、主として朝鮮近現代文学を専攻する日本留学生数人を中心に、それ以外の何人かも時々加わる形で1980年から1985年までの間に文人25名に対して再訪を含めると計30回ほどインタビューした。（文末の表：文人インタビュー一覧、参照）2回訪問したケースは訪問参加者が異なる場合と、後日、色紙やサイン本をくださるというので取りに伺った場合などである。

訪問前には各自、その文人の経歴や作品などに対して、できるだけ調べ質問事項を考えておくなりしたが、つけ刃的なレベルにとどまっていたことは否定できない。極端な場合はその文人の単行本などを持参してサインをもらったり写真を撮ったりしただけのこともある。

メモだけでは忘れそうなので、録音することも検討されたが、そのことによってかえって文人が緊張して無難な「きれいごと」しか言わなくなるのでは、という危惧もあり、断念した。一方、事前了解を取る形で一覧表のNo. 20以降ではほとんど録音もしている、これらの分析・紹介が今後の課題である。

訪問時期は大きく前期：No. 1～21（1980. 7～81. 12）と後期：No. 22～28（1985. 1～3）の二つの時期に分けられる。前期だけで目標とした主な文人（小説家、詩人、評論家など）はほぼ網羅されたが、その後、補充したり、筆者の帰国（1985. 3）を前にしてあわただしく数人を訪問することになった。芹川氏の意見で文学者以外の人文系学者も、ということで、著名な史学者・李丙燾氏と国語学者・李熙昇氏のインタビューが加わった。（以下、原則として敬称略）

*九州産業大学名誉教授・九州大学韓国研究センター学術共同研究員

これらの訪問の記録としては筆者が次の2回で11名分は簡単ながら書き残してはいる。

(以下、漢字は便宜上、原則として略字体で示す。)

- ① 〈元老文人訪問記(上)〉、トッケビだより(トッケビの会・同人誌)第2号、1982.5.

朴鍾和、白鉄、金素雲、朴花城、崔貞熙、金基鎮(号=八峰)

- ② 〈私の会った韓国の元老文人たち〉、文学思想327号、2000.1.(韓国語)

兪鎮午、李軒求、金東里、李殷相、趙容万

これ以外に鴻農氏が次の一文をものしている。

- ③ 〈元老文人訪問一聞き書・韓国近代文学一〉、コリアナ第4号、1988.冬季号

朴鍾和、白鉄、金素雲、朴花城、崔貞熙、金基鎮、金光均、趙容万

そこで今回はまだ一度も活字化されていない次の11名を取り上げることにする。

毛允淑(詩人)、徐廷柱(詩人)、尹一柱(詩人・尹東柱の弟)、黄順元(小説家)、朴斗鎮(詩人)、鄭飛石(小説家)、具常(詩人)、金松(小説家)、柳呈(詩人・翻訳家)、李丙燾(史学者)、李熙昇(国語学者)

これで一覧表のほとんどの文人が一応は網羅されたことになる。一度も取り上げられていないのはNo.3 尹興吉、No.25 任軒永だけだが、このお二人は当時はまだ若い中堅文人であったので、本来の目的である元老級文人の記録としては省かせてもらった。

以下、訪問年月日の早い順に記すことにする。記述方式は、こちらの質問に答えてくれたことと、ご本人が自由に話されたことが混じっているが発言順を原則とし、内容が事実か否かに関わらず、概ね話されたとおりに記した。一部、筆者の注記は〔〕内に示した。

1. 毛允淑(1910～90)

訪問年月日：1980.8.21.

訪問者：鴻農、白川

略歴：咸鏡南道出身の詩人。1931年、梨花女子専門学校卒。女子高教師や記者として活動。1948年、国連に韓国代表として参加。1949年、文芸雑誌《文芸》創刊を主導。1954年、国際ペンクラブの韓国本部創立に関わる。(ペンクラブ副会長を経て、第4代会長を務める。)その後、国会議員、韓国現代詩協会会長などを歴任。第1詩集《輝く地域》(1933)以来、詩作を続けたが、長期にわたるベストセラー本としては恋愛散文集の色彩が濃厚な《レンの哀歌》(1937)が有名。

インタビュー：韓国ペンクラブの重鎮として長らく君臨していた毛允淑女史らしく、堂々たる応対ぶりという第一印象だった。事前連絡していた我々がペンクラブの事務所に訪ねていくと、8月下旬の暑い日でもあり、ほぼ肌着姿でくつろいでおられたようで、急いで上着を引っかけて40分ほどのインタビューに応じてくださった。以下にお話をまとめてみる。

- ・「私は李光洙の最後の弟子だ。」[事実、女史の第1詩集を李光洙もほめている]。李光洙は美男でヒューマニストだった。[一時、恋愛感情があったらしい]
- ・日本の作家では1970年、東京でのペン大会で川端康成に会って感激した。詩人では石川啄木に惹かれた。
- ・〈日帝時代〉(植民地期)にも印象に残る「いい日本人」は多かった。例えば鍾路警察署の署長は、「日本語で詩を書け」とは無理だと南次郎総督に掛け合ってくれた。
- ・梨花女専在学当時に習った国文学の日本人の先生は実力があり、〈源氏物語〉などを興味深く聴講した。
- ・今も詩作はしている。主に叙事詩だ。
- ・中上健次と尹興吉との対談の話は聞いている。
[ちょうどこのインタビューの2ヶ月前に筆者も通訳に合わせた両人の対談集《東洋に位置する》(1981、作品社)の対談がソウル市内で行われていた]

◎筆者の感想：女性文人が少なかった中で長期間、文壇の重鎮として居続けられた理由をもう少しお聞きしたかったが、短時間で、しかもペンクラブの事務所の中では無理だった。最近、1950.11.7

～9. の毛女史を実写した10分強の映像「別人だとの指摘もあるが」を見たが、撮影を意識した「俳優」ぶりを感じた。これも彼女の性格等を推測するのに参考になるかもしれない。

2. 徐廷柱 (1915 ～ 2000)

訪問年月日：1980. 9. 21.

訪問者：鴻農、白川、芹川、関根、長友英子（ソウル大）



(前列左から：筆者、徐廷柱詩人、関根、後列左から：芹川、鴻農)

略歴：全羅南道高敞出身の詩人。1935年、中央仏教専門学校（後の東国大）入学。1936年、東亜日報の新春文芸に詩が当選。1941年、第一詩集《花蛇》刊行。1949年、韓国文学家协会創立時に詩部委員長。1959年、東国大教授（～79年）。1960年、第4詩集《新羅抄》、1972年、《徐廷柱全集》（全5巻）、1977年、韓国文人協会理事長（～78年）、一時、ノーベル文学賞候補として期待されたが、植民地期の親日的な詩の存在や1980年代の全斗煥政権に親和的との批判を浴びもした。しかし死後、金冠文化勲章追贈。

インタビュー：2時間半に及んだため、かなり多方面に話が広がった。まずはご自身の私的なことや信仰など。

- ・詩集の外国語翻訳は英訳60篇、仏訳100篇（1982年の予定）、スペイン語訳も計画中で、1983年までに6か国語になる。[ノーベル賞をかなり意識していること]

- ・父親は朝鮮第一の大地主・金性洙の家で農監をやっていた。
- ・徐氏の祖先には〈神仙〉が多かったようだ。周の皇帝・穆王の時、徐偃王が徐という国を建て、朱蒙が朝貢したのだ。
- ・禅雲寺は元、神仙のいた所で、仙雲寺だったが、仏教式に改められた。
- ・仏典の中では恍惚とした感覚が強い〈観無量寿経〉から最も影響を受けた。永遠を教えるのはやはり〈法華経〉だ。時間を気にしない永遠はやはりキリスト教より仏教だ。ネパール・インドの旅で特にこれを感じた。乞食でありながら道人である姿。
- ・中央仏専を3年で中退、解放後、文教部に〈新羅研究〉なる論文を提出、副教授の資格を得た。正教授は月給千ドル（7-80万ウォン）、名誉教授になると45万ウォンだった。
- ・原稿料は新人で200字当たり1000～1500ウォン、詩は散文の字数の10倍で計算する。
次にやっと文人の話である。
- ・李光洙：性格は強い方だ。政治力はないが、「おとな」ではある。とにかく影響力が大きかった。〈親日〉は屈服したのではなく、自覚の上の行動だ。日本が負けるとわかっていればあんな行動はしなかったはず。小磯総督が春園を呼んで、シベリア総督にしてやると言ったとか。女真族か北方系の青い魅力的な目をしていて。
- ・林和：3年ぐらい年上の友人[実際は7歳年長]。頭もいいし、勘が鋭い。東京に行ってから中野重治の弟子になり、社会主義者になった。1934年のKAPF弾圧後、1939年頃会った。妻の池河蓮にも会い、回基洞の家によく行った。解放後には出会っても知らぬふりをされた。林和は薛貞植（米軍政庁弘報局長）らのせいで巻き込まれたのでは。
- ・当時の人気詩人は呉章煥、私、金光均、李庸岳で、林和は出てきたところだった。
- ・解放後、社会主義者になってしまった文人たちは道で会っても挨拶もしなかった。
- ・朴鍾和：中人出身。大地主（2千石）の息子。解放後、朝鮮青年文学家协会にはすでに青年ではなかったのでは不参加。この団体は当時、数少なかった。

た右派の作家の集まりだった。1949年、韓国文学
家協会ですべて初代会長に。

- ・李箕永：マッコリも一緒によく飲んだ。韓雪野よりつまらない、魅力のない作品だ。
- ・崔載瑞：やはり親しい私の先輩。酒好きで、飲むとよく泣いた。林和などよりずっと上だ。林和は彼が《人文評論》誌で発表の機会をやったのだ。《国民文学》誌でウルトラ親日派になった。春園・李光洙と同じくやはり今は同調するしかないという一種の信念の上でのことだろう。春園同様、国際政治について無知だったのだろう。兪鎮午も同じだ。
- ・金東仁：大金持ちの息子で自尊心の強い妙な人物だった。川端龍子の私学校に通った。[川端玉章の川端画学校の記憶違い] フローベールの影響大。国木田独歩の《運命論者》とも類似。

のちに北支慰問団に駆り出されても傲慢で、「あなたは誰です？」と言われて「ワシは文人団長じゃ」と言ったとか。

◎筆者の感想：筆者は大学で毎週講義を拝聴していたし、大学院の「講義」はこの自宅でなさったので、相当いろいろなことを伺っていたつもりだが、まだまだ興味深い話が多かった。それを詩人らしくリズム感のある語り口で滔々と話されるのがまた魅力だった。

3. 尹一柱 (1927 ~ 1985)

訪問年月日：1980. 10. 3

訪問者：鴻農、白川、宋友恵



(左から：筆者、尹一柱先生、宋友恵作家)

略歴：尹東柱の10歳下の弟。建築学者で詩人でもある。成均館大学教授を歴任。

※尹東柱：(1917~1945) 中国の北間島地方（現・延辺朝鮮族自治州）出身の詩人。1941年、ソウルの延禧専門学校を卒業後、日本へ留学。立教大を経て同志社大英文科に転学。1943年、独立運動の嫌疑で逮捕され、懲役2年となり、福岡監獄に移送され、謎の獄死を遂げる。生前に詩集の出版はなかったが、留学出発直前に友人に贈った自筆詩集が死後、尹一柱・編《空と風と星と詩》(1948) として刊行され、ベストセラーに。

インタビュー：今回の訪問には尹東柱の親戚筋（従兄弟・宋夢圭の弟の長女）に当たる小説家・宋友恵氏も同行した。まず、一柱氏は尹東柱とお顔がよく似ているのに驚いた。（写真参照）2時間半近くにわたるインタビューで東柱について親切に語ってくれた。まず福岡監獄で獄死した時の話になった。

- ・監獄からは月に1度の葉書が許されていたが、1945年は中旬になっても連絡がなかった。そこへ2月16日死亡との電報（トウジュ シボウ シタイ トリニコイ）が2日後の日曜に届いた。家族が教会に行っていて、電報は私が受け取った。父「永錫」が従兄弟の尹永春「詩人、後に英文学、中文学者」とともに福岡へ。
- ・尹詩人を初めて高く評価したのは当時、京郷新聞の主筆だった鄭芝溶。1947年2月16日に追悼会を開いてくれた。
- ・日本留学をした動機：朝鮮には専門学校しかなく、京城帝大は難しいが勉学はもっとしたく、父もそれを認めたため。26歳にもなってすまないという気持ちはあったようだ。
- ・学兵募集は1944年からで、何とか逃れた。
- ・共産主義思想についてどの程度知っていたのかは不明だが、育ちがキリスト教関係の家だったので、あまり知らなかったのではないかと。ただ、当時、北間島では左右翼の争いがひどく、このことはすべて見ていたはず。社会主義系の思想を持つ性格ではなく、特高の記録にもない。

- ・東柱ではなく、童舟という筆名を中学時代から使っていた。北間島の龍井にある中学に通っていたが、この地域の人口の30%ほどは中国人で、彼らも朝鮮語をしゃべっていた。逆に小3から中3まで週に1～2回の中国語授業もあった。東柱は中国語もできたので、後に「詩壇？ 不知道」などという落書きもしている。
- ・戦後、日本の新聞で彼の抵抗の詩や遺稿の行方不明、死因の闇などについて何度も報道されている。（西日本新聞：1970. 8. 16、京都新聞：1971. 1. 26、西日本新聞：1978. 2. 16）[尹一柱氏は一時、日本滞在されていたので、新聞を入念にチェックされている]
- ・金素雲の日本語訳にも抜けているところがある。
◎筆者の感想：ご本人は建築学の専門家でおられるのだが、詩も書いておられる、おとなしいお方だった。このやさしい弟さんがおられなければ兄の事績の整理はもっと困難になったのではないと思われる。

4. 黄順元 (1915 ～ 2000)

訪問年月日：1980. 11. 2.

訪問者：鴻農、白川、芹川、水野、関根



(左から：関根、黄順元作家、鴻農、芹川、筆者)

略歴：平壤近郊出身の作家。15歳ごろから詩作。1934年、平壤の崇実中学校を卒業して日本へ。1939年、早稲田大学英文科を卒業して帰国。1946年、南朝鮮に越南してソウル中高等学校で国語教師。その後、短編100余篇と長編7篇を発表。短編〈鶴〉(1953)などが高校国語教科書にも載る。1957年、

芸術院会員に。1961年、長編〈木々、坂に立つ〉(1960)で芸術院賞受賞。1966年、長編〈日月〉(1962-63)で三・一文化賞受賞。1957～80年まで慶熙大教授。死去後、金冠文化勲章追贈。

インタビュー：5人でご自宅に押しかけた我々に対してパジ・チョゴリを丹精に着こなして現れた黄作家は、1時間半ほど終始キリッとした表情で接してくれた。(写真参照)

- ・日本留学の動機：すでに京城帝大はあったが、法科中心だった。文科系で後の小説家は李孝石氏ぐらいだ。文学には幼少時から興味があった。「韓国文学」と言っても特に大学にはなかったので日本に渡った。日本に行けば翻訳が発達しているので何でも読めると思った。
- ・故郷の平安南道はキリスト教が早くから入ったので目覚めていた。東亜日報の販売部数はソウルより多かったぐらいだ。金素月、金東仁、李光洙らは皆、平安道地方出身じゃないか。しかし私は中央文壇と没交渉だったし、交渉が苦手な方なので文人をあまり知らない。
- ・李孝石にはあまり会ってはいないが、インテリジェンスのある人と見受けた。しかし農村を扱った小説は彼がロマンチストなので、修辭学的には美しいが中身まで美しいとは言えない。むしろ金裕貞の小説の方がよっぽどいい。
- ・解放後、数か月間は自由に文学活動ができた。しかし徐々に皮膚感覚に合わなくなり1946年5月に越南した。私自身は共産党から〈テーマ小説〉を書くよう命令されたことはない。
- ・早稲田の英文科には朝鮮からの留学生が5人いた。金永郎の弟や白樂晴の親戚の人など。
- ・李箱：東京で何度も会い酒も飲んだ。東中野にアパートがあった。全く話好きだった。金文輯についても面白い話をしていた。金素雲が彼と親しかったというのはよく知らない。
- ・私が好きな西洋文学は仏文(フローベール)や露文(トルストイ、チェーホフ)だ。英文学や独文学は肌に合わない。
- ・日本文学では志賀、川端、太宰(全集を持っていた)

る)らが好き。大江健三郎も。谷崎は西洋小説に最も近かったが私は親しめない。芥川はあまりにパサパサしていて余裕がない。今でも《文芸春秋》はよく読む。

- ・韓国小説は西洋小説と直接衝突したので日本文学より西洋小説に近い面がある。だから翻訳しても西洋人は日本小説より韓国小説を好むようだ。[日本人もノーベル文学賞の候補と言われたことあり]
- ・田中英光や太宰は自殺したが、読者に感動を与えていたのだから悪い影響を与えたわけではない。李箱は生前、有名ではなかったので問題にはならない。
- ・金史良[黄順元より1歳年長で平壤出身]には平壤で会ったことがある。[ところが1992. 3. 19. に電話で聞きすると、「名前は知っていたが会ったこともないし、他人のことは別に気にしていない」と、案外素っ気なく答えられた]
- ・近代韓国小説の作家としては金裕貞らがいい。廉想渉は我々には感動を与えられない作家である。最近の作家では黄皙暎、李清俊、趙海一、趙世熙らがいい。
- ・幼い時、興夫伝や春香伝などは市(いち)で買って読んだ。新小説は読まなかった。後に教壇に立つようになって李人植などを読んだが、彼以外の新小説は何でもないものだ。

◎筆者の感想：キリリとした表情で最初は緊張したが、次第に打ち解けて話してくださった。曲がったことはお嫌いという印象。東京時代が懐かしい様子／文壇人は「知らない」と強調／故郷である北朝鮮については何も語りたがらない。／本棚に〈アナキズムの哲学〉〈莊子〉が見えた。

5. 朴斗鎮 (1916 ~ 98)

訪問年月日：1981. 1. 14.

訪問者：鴻農、白川、芹川、水野、関根



(前列左から：朴斗鎮詩人、関根、筆者、後列左から：鴻農、芹川)

略歴：京畿道安城生まれの詩人。1939年に詩が鄭芝溶の推薦で《文章》誌に載って登壇。特に有名なのは、解放直後の1946年に刊行された朴木月、趙芝薫との三人詩集《青鹿集》の人気である。1946年、当時の主流だった左翼系文壇に対抗した朝鮮青年文学家协会の創立に加わる。彼の詩は自然を題材としながら民族意識を盛り込むという特徴があるとされる。詩集は《水石列伝》(1973)等10冊以上あり、1984年に《朴斗鎮全集》が出ている。1972~81年、延世大教授を歴任。1970年、三・一文化賞、1976年、芸術院賞を受賞。

インタビュー：延世大近くにある国際郵便局裏のみすばらしいほど質素な自宅で韓服に身を包み、腕組みしたままぼそぼそと1時間半弱語ってくれた。日本人に警戒心があるかの如く視線を合わさないのだったが、内容は事実を誠実に話すという印象だった。(写真参照)

- ・崔南善：日本の影響は大してない。時調をやりながら新体詩を書いたのだ。
- ・李泰俊：ソンビ(高潔な士人)らしい、冷静で趣のある人だった。日帝末期に日本語でなければ雑誌を出せないようになり、《人文評論》誌の崔載瑞は半分が日本語でも出すと言ったが、彼は「そ

れならやらない」と言った。[李泰俊主宰の《文章》誌のこと]

- ・李陸史：恐ろしい人。
 - ・鄭芝溶：朴詩人を推薦した先輩だが、デビュー当時は会ったことがなく、後で挨拶した。北原白秋らの影響があるのでは。誠実な人だから解放後は思想的なもののために作品が書けなかったのだ。
 - ・《青鹿集》収録の作品は、その直前の数年間、朝鮮語がなくなるという危機感から書き溜めていたものだ。1939年前後にデビューしたのは5人いたが、朴南秀、金鍾漢、李漢稷はソウルにいなかったので朴木月、趙芝薫との三人詩集になった。〈青鹿派〉のように言われるが、文学的流派ではない。
 - ・日帝末期に朱耀翰司会で詩の朗読会があった。日本語で書いた人が多かったが、我々はあまり知られていなかったのでそうせずに済んだ。私は1942～45年の間、韓国語でも発表はない。その直後《青鹿集》が好評を得た。運がよかったのだろう。新しくかつ伝統的で。
 - ・モダニズム系詩人（李箱、金起林、金光均ら）は私の生理に合わない。
 - ・越北した詩人：皆、概ね詩自体は大変よい。8・15以後に急に左翼詩を書いている。呉章煥は小学校時代の同窓生。美男子でとても感傷的な詩を書いた。李庸岳は友人で、解放後もよく会ったが、詩は私の生理に合わない。白石には会ったことがない。
 - ・叙事詩は難しく面白くない。現代人の感覚に合わないのでは。小説の方がいい。
 - ・本格的文学には社会性、倫理性、芸術性がなければならない。この芸術性というのは、人生、社会、人間全体のためのものでなければならない。
- ◎筆者の感想：朴詩人は生真面目な感じが強烈だった。これには学歴を含めて何かコンプレックスのようなものがあって、つい頑なな姿勢になるのではないかと思われた。しかし質問には誠実に答えてくださった。

6. 鄭飛石 (1911 ~ 91)

訪問年月日：1981. 5. 7.

訪問者：鴻農、白川、芹川、水野、関根



(左から：水野、鴻農、関根、鄭飛石作家、筆者、芹川)

略歴：平安北道義州生まれの小説家。1932年、日本大学文科を中退して帰国。1936年、東亜日報の新春文芸に短編〈卒哭祭〉が入選し、翌37年には朝鮮日報にも〈城隍堂〉が1等当選して登壇したが、新聞記者や解放直後には雑誌《大潮》の編集主幹などを歴任した。1950年代から専業作家に。最大のベストセラーはソウル新聞に連載した長編〈自由夫人〉(1954)で映画化もされた。大学教授夫人の自由奔放な生きざまを描いて朝鮮戦争直後の新時代の憧れを代弁する作品となった。大衆人気作家となった彼だが、歴史物や中国の古典に題材を取った作品など多彩な創作をしている。1961年、国際ペンクラブ韓国本部副委員長。

インタビュー：2時間半にわたり、様々な話をしていただいた。写真でもうかがえるように、普段着の作家という印象。

- ・文学の道に進んだ動機：書堂で〈三国志〉を暗記している老人がいた。自分も物語語りにでもなれたらと思った。また当時は道端で新小説を売っていて、いつでも手に入った。
- ・鴨緑江対岸の安東に満鉄中学（日本人学校）があり、スパイスのように朝鮮人も1、2人入れたので入学したが、故郷近くにやっと新義州中学（日本人学校）ができて転校した。2年生の時に作文で

激賞され、作家になろうと思った。また当時は他のことをしても朝鮮人はダメだった。(判・検事と医者ぐらいなもの)

- ・昭和4,5年(1929-30年)日本文学全集が出て手当たり次第読んだ。大衆・世界文学も。
- ・新義州高等普通学校(朝鮮人学校)に移った。白鉄が4年先輩。左翼系の読書会で検挙されたが執行猶予5年で放免され、日本へ。広島で中をめぐりながら入試が終わっていた。他にも地方の学校を考えていたが、東京の方が警察がうるさくないとのことで日大に入った。実家は地主で苦労したことはなかったが、医学・法学以外の学校はダメだと言われた。こっそり文科に入ったがバレて、2年で中退した。
- ・徳永直らが編集する《文学新聞》の懸賞募集に〈朝鮮の子供から日本の子供へ〉を応募して当選、自信を得た。当時は朝鮮語の方が不得手で日本語で書いたが、これでいいのかと反省。むしろ日本で朝鮮語を磨こうとした。洪命熹の〈林巨正〉の語彙が豊富で勉強になった。
- ・崔南善：記憶力が抜群。／李光洙：話好きだった。
- ・外国作品ではトルストイの〈復活〉、石川達三の〈結婚の生態〉[1938]が好きだった。
- ・1936年の東亜日報の新春文芸では金東里が当選し、私は2等入選だった。それを契機にソウルに行き、文学同人誌計画もあったが日の目を見なかった。
- ・徴用を避けて毎日新報社に入社[1940年]し、趙容万、白鉄らと仕事をした。
- ・金剛山が好きでよく行った。日本人の博識な道案内人がいた。僧侶は徴用されないので本気で金剛山に登山準備をしていたところ、8・15を迎えた。
- ・解放後は以北の財産もなくなり、食べていくために新聞小説を書いた。そして次第に大衆物に手を染めることに。

◎筆者の感想：訪問した文人の半数以上が民族服(韓服)で出てきたが、自宅なのに日本人訪問者ということでなぜか緊張していた人が多かったということか。前期(1980~81年)にインタビューした文人の中で普段着で迎えてくれたのはこの鄭作家と金東里作家、それに評論家の白

鉄氏、李軒求氏ぐらいである。

7. 具 常 (1919 ~ 2004)

訪問年月日：1981. 12. 21.

訪問者：鴻農、白川、芹川、関根

略歴：咸鏡南道元山生まれの詩人。1941年、日本大学宗教科(専門部)卒業のカトリック教徒。1942~45年、咸興の〈北鮮毎日〉社で記者生活。1946年に元山文学同盟刊行の詩集《凝香》に載った詩〈黎明図〉などが翌年、北朝鮮の文学芸術総同盟から退廃的、反動的などと批判された。これが契機で南朝鮮に脱出した。1951年、第1詩集《具常詩集》刊行。1952年、嶺南日報の主筆兼編集局長に。第2詩集《焦土の詩》(1956)。1962年、京郷新聞論説委員兼東京支局長に(〜65年)。人生の一大転機が〈凝香事件〉であったことは間違いない。

インタビュー：本名は具常浚。2時間半にわたってかなり広範囲の話を聞かせてもらった。写真も撮ったが不注意でその後、紛失してしまったのが残念である。リビングの大きな鳥籠に小鳥がいた。面談中に班常会[町内会]のお知らせ放送があった。

- ・自分はカトリック教徒だが、日大宗教科の80%は仏教関係だった。
- ・《凝香》は解放記念詩集で、平壤では《北風》というのがあったはず。既成詩人3人(具、康鴻運、盧良根)が中心で5篇載せた。ソ連歓迎の辞やプロレタリアートの歌もあったのに、意図的にでっち上げられた事件だ。平壤から検閲員として金史良、崔明翊、宋影、金利錫が元山にやって来た。
- ・1946年12月下旬、38度線近くに出張命令を出してくれたのを機にすぐに出発。しかし「出張命令書」を紛失して捕まった。47年2月、たまたまロシア人の歩哨がいない収容先の便所の大便穴から抜け出た。運よく南朝鮮へ道案内する中年男性に巡り合って米軍哨所に辿り着いた。
- ・詩〈黎明図〉の芸術性には自信があった。解放の賛歌ばかりの時代にソ連軍に対する「比喩」のつ

もりで書いた。

- ・ソウルに来て金起林と鄭芝溶に会った。鄭詩人はカトリックだからすぐ会った。
- ・解放前に呉章煥に会ったことがある。彼は画家の李仲燮と親しかった。[具常も親友のはず]
- ・李泰俊の《文章》誌は象徴主義や浪漫主義を打ち出してレジスタンスのつもりだったのだろうが、結局残ったのは朴斗鎮らの「自然の妙理」を描いたものだけではないか。
- ・日大時代の読書は当時の大学生一般が読んだものと私も同じだ。阿部次郎〈三太郎の日記〉、賀川豊彦〈死線を越えて〉、河上肇〈貧乏物語〉、西田幾多郎〈善の研究〉など。世界文学全集も同じ。短歌は斎藤茂吉、詩では金子光晴、萩原朔太郎。北川冬彦には一度会った。
- ・詩人では私と親しかった空超・呉相淳がいい。東方では一番の仏教の賢者ではないか。感覚的な絢爛さはないが、虚無がどういうものなのかを示してくれた。〈有無相通〉が辞世。
- ・李光洙：2度会った。端正で基本精神も強く見えたのに「神棚の前にひれ伏して」などと言ったというのが信じられない。しかし我々は外部的に強制された時代の人間だ。外部・内部の分離を最小限に減らすのが私の想念の焦点で、芸術院会員をやめたのもこのためだ。
- ・韓国知識人全体がロゴスのよりはパトス的になっている。これでは汎神世界に陥ってしまう。韓国には昔から認識論がなく、実践倫理しかない。実践的エトス的な生を営んだのは黄真伊しかない。例外的なのは元晧、李退溪、李栗谷ぐらいだ。三・一精神というが、宗教・思想はあるが、厳密にはカントの純粹理性批判には及ばない。文学作品もその影響で感性的次元で扱われている。私の場合は少し違う。

◎筆者の感想：詩人のイメージにしてはやや理屈っぽい話が多くて驚かされた。また彼の教養の原点には日本での日本語による人文書が大きな比重を占めているように思われた。唯一、相当熱を込めて話してくれたのが越南時の脱出劇だ。収容されていた建物の見取り図まで描いて

くれた。人生最大の岐路だったことがわかる。

8. 金 松 (1909 ~ 88)

訪問年月日：1985. 1. 27.

訪問者：芹川、白川



(左から：筆者、金松作家、芹川)

略歴：本名：金玄松。咸鏡南道咸州郡出身の劇作家・小説家。咸南高等普通学校を経て1927年渡日し、日本大学芸術科を中退。1932年に帰国したが1934～39年に再渡日した。1935年頃から戯曲の執筆が多くなり、1939年には戯曲集《湖畔の悲歌》まで出したが、1943年以降は小説家に転じた。代表作に〈男寺党〉(1948) などがある。一方、1945年末に総合誌《白民》(後に文芸中心に)を創刊し編輯兼発行人を務めた。ソウル新聞文化部長、《自由文学》主幹の他、1973年、全国小説家協会会長となるなど多彩な活動で知られた。

インタビュー：ご自宅ではなく、ホテルに出向いてもらって1時間半ほど話を伺った。

- ・1930年頃、ソウルの朝鮮劇場(仁寺洞にあった当時最も大きな劇場という)で戯曲〈地獄〉を上演したが、当局の命令で2日間で中止した[金松氏は当時、日本滞在中のはずなので、一時帰国してのことなのか不明。1932年の可能性も]。この劇場は焼失し、後の芸総本部の場所に。
- ・1945. 12～50. 5. の間発行していた《白民》は3万部刷ってそのうち1. 5万部は2号まで麻浦から平壤に送っていた。全23号のうち21号までは自分が

編集兼発行人だった。22、23号は中央文化協会の機関誌になった。親しかった金珖燮が家売って資金を作っていた。その金珖燮は私が1959年から主幹だった自由文人協会の機関誌《自由文学》の版權を譲り受けて彼が主幹となった。財政難だったので助けてやったが1963年、廃刊。

- ・〈塔〉を書いた韓雪野は咸興出身なのでよく遊んだ。解放後は大した作品がない。
 - ・林和〔1930～31に渡日中〕にはよく会った。横浜の林房雄の文化住宅のすぐ近くにいた。林和は才能のある人物だったが、野心があったとは思えない。細かく考え抜く性格。
 - ・張赫宙の〈餓鬼道〉〔1932〕は私の滞日中で、良く書けていると思った。しかし後はダメだ。
 - ・《現代文学》〔1955～〕の編集長だった呉永寿は私の弟子だ。ライバルではない。
 - ・李光洙：博学で東洋的人物だった。東洋的思想に深く入れればよかったのに。
 - ・金東仁：故郷に一度来た。親しくなれたはずだが、文学的に立場が違った。
 - ・李庸岳：故郷にも遊びに来て親しかった。サバサバした性格だった。林和とは反対の性格。
 - ・崔曙海：1932年に若死にし、彌阿里的墓の共同墓地移転で忘憂里に移葬したのは私だ。〔咸鏡北道出身なので〕二人の息子は以北にいるはず。
 - ・権煥：東大美学科〔独文科か〕にいたので東京でよく一緒にいた。金史良の先輩だ。私が一時、警察に捕まった時、私は杉並の留置場にいたが、彼は警視庁の留置場だった。〔1929年の留学生雑誌《学潮》の筆禍事件〕
 - ・記憶に残る日本作家：中野重治、徳永直、林房雄、平林たい子
 - ・西洋文学ではメーテルリンクやストリンドベリ、ロシア作家もよく読んだ。
- ◎筆者の感想：多彩な活動をした方なので、話題も演劇から雑誌などまで多方面にわたった。インタビュー時にすでに76歳だったが、昔のデータなどの記憶力がすごかった。

9. 柳 呈 (1922～1999)

訪問年月日：1985. 2. 2.

訪問者：芹川、白川



(左から：筆者、柳呈詩人、芹川)

略歴：咸鏡北道鏡城出身の詩人・翻訳家。日本に留学し、1945年、上智大学哲学科を中退。17歳にして堀口大学の推薦で文芸誌《若草》に日本語詩が載る。同じく日本留学中だった数年先輩格の李庸岳、金鍾漢からも刺激を受けた。帰国後すぐ1946年に越南した。1956年、中央日報文化部長、1970年、日文新聞《太陽新聞》編集委員、韓国ペンクラブの中央委員も歴任した。詩作を継続しながら1960年代からは韓国文学の日本語訳や日本文学の韓国語訳も続々こなした。《川端康成全集》(1969)や編著《現代日本詩集》(1984)などが有名。

インタビュー：1985年春の訪問はまだ韓国に留まっていた芹川氏と筆者の二人だけとなった。普段着で2時間半にわたってざくばらんに話していただいた。

- ・李庸岳：同じ鏡城出身の8歳年上の先輩で、1932年頃から1940年頃まで東京にいた。上智大新聞学科にいたので学校の先輩でもある。第1詩集《分水嶺》(1937)は自費出版だった(三文社刊行となっているのは、ここにハングル活字があったからだ)。芝浦で沖仲仕もやっていた。学校は初め1年は日大だったが、上智大選科に移って本科に編入されたのだ。上智は外国人をよく受け入れており、韓国人差別もなかった。頭のいい人がよく

通った。帰国後、1943年に「某種事件」ですべての原稿を咸鏡北道警察部に押収され、清津刑務所に収監されたはず。解放後1949年には《現代詩人全集》(同志社)の第1巻として〈李庸岳集〉が出たので出版記念会をしたのに朝鮮戦争となり、人民軍後退の時に北に行ってしまった。

- ・私の詩の先輩は李庸岳以外では李燦、白石、金起林、鄭芝溶、呉章煥である。呉は天性の詩人で背も高かった。若いのにタバコをくわえていて初めは傲慢な人と思ったが、違った。
- ・朴魯春：10歳年上の詩人で1940年10月に法政大高師部(日語・漢文科)に入ったが、戦時短縮卒業で43年9月には卒業した。その後、日本出版配給(株)に45年3月まで働いてから帰国した。
- ・私自身、8・15まではほとんどハングルもできなかった。だから私だけでなく90%の人は日本語の作品を読んだのではないか。朝鮮語の詩を読んだのは10%ぐらいじゃないか。
- ・張赫宙：〈餓鬼道〉は日韓ともに反応は良かった。〈権といふ男〉は〈阿Q正伝〉に似ているとして批判が多かった。〈追はれる人々〉はドストエフスキーの真似だ。
- ・金素雲：8・15の前から知ってはいたが尊敬する気にはなれなかった。嫉妬のせいかも。

◎筆者の感想：訪問者が日本人であるためか日本での話が多かった。懐かしくもあるのだろう。李庸岳への思いが特に深いようだった。またご自身が詩創作だけを貫けなかった悔しさがある感じがした。

10. 李丙燾 (1896 ~ 1989)

訪問年月日：1985. 3. 2.

訪問者：芹川、白川

略歴：京畿道龍仁郡で出生。1910年、満14歳で早婚[當時はよくあった]、以後9人の子女を儲ける。1916年、早稲田大学に入学し史学及び社会学科で学び、1919年7月に卒業。中央学校などで歴史や英語を教えた。1920年、文芸同人誌《廢墟》の同人に。1925

～27年、朝鮮史編修会で修史官補。1934年、朝鮮人だけの震檀学会を立ち上げる。1946年、ソウル大に史学科が創設され教授に。1955～82年、国史編纂委員会委員。1960年、一時、文教部長官。1960～80年、学術院会長。《韓国史大観》(1948)以来、高麗史など古代史研究の大家。

インタビュー：すでに89歳になっておられたが、お元気でタバコもやめないという。淡々とした語り口で2時間弱も話していただいた。

- ・早稲田時代には崔斗善[崔南善の弟]、玄相允と同じ下宿にいた。[若松町147、小峰方か。一時、同居したかもしれないが、玄は鶴巻町472、中西方でも住んでいる]
- ・早稲田には当時、2年先輩に申翼熙(政治経済科)、1年先輩に玄相允(史学科)、金與濟(英文科)がいた。
- ・李光洙は哲学科だったが忙しいらしく、1週間に3回ぐらいしか登校していなかった。でも1か月に一度ぐらいは蕎麦屋の江戸川で「同窓会」をやっていた。
- ・私の指導教授は西洋史の煙山専太郎教授だったが、3年生の時、講師だった津田左右吉先生の紹介で池内宏先生に会って影響を受けた。その時初めて《李朝実録》を見た。《大日本地名辞書》で有名な吉田東伍先生もおられた。西洋史から東洋史に専攻を変えたきっかけだ。
- ・影響を受けた韓国人としては崔南善と安廓(号・自山)だ。安氏は15歳ほど年上だった。[実際は10歳年長] 1916年頃、東京にいたが、学校[日大]には行かずに図書館通いしていた。体系的ではなかったが、頭のいい人だった。いつも家に遊びに来ていた。
- ・文芸誌《廢墟》の同人になったのは勉学生活が硬いので情緒面に惹かれたからだ。この雑誌の創刊号(1920. 7.)は100部刷った。印刷費は編集人だった高敬相がすべて出した。同人には廉想渉のほか、文一平、黄錫禹らがいた。黄氏らとは1920年2月にYMCAで詩の朗読会をやり、私が司会をした。
- ・私は長らく学術院長だったが、20年間、芸術院長

を務めたのが朴鍾和だ。歴史小説をよく書いた。〈世宗大王〉[1969]を書いた時は入院していたのに一日も休まず書き続けていた。

◎筆者の感想：我々に配慮されてか文学関係の人脈などの話が多かった。早稲田時代の印象が相当に強かったようだ。外国人である我々若造はどうせ知らないだろうから一から教えてやろうという感じで、かえって気楽に裏話をざっくばらんに語ってくれた。

11. 李熙昇 (1896 ~ 1989)

訪問年月日：1985. 3. 8.

訪問者：芹川、白川

略歴：京畿道広州郡生まれの朝鮮語学者。1908年、満12歳で早婚。ソウルの漢城外国語学校で英語を学ぶ。私立の中央学校にも通い、1918年に卒業。京城紡績に就職したが勉学を続けたく、延禧専門学校数物科を1925年に卒業後、開校したばかりの京城帝大予科を経て法文学部朝鮮語学・朝鮮文学講座を1930年に卒業した。朝鮮語学会の幹部を務め、〈ハングル綴字法統一案〉(1933)の発表にも関わった。1939~40年、東京帝大でも研究。1942年、朝鮮語学会事件で3年間投獄された。解放後、ソウル大教授に。1968年、学術院副会長。《朝鮮語学論攷》(1947)以下、著書、論文多数。

インタビュー：すでに89歳になっておられたが矍鑠としておられ、若い時からコーヒー好きだとのこと。ちなみに、6日前に訪問した李丙燾氏と何と生没年が同じとは驚きである。幼少時から様々な勉強をしてきたことから始めて2時間弱で存分に語ってくれた。

- ・語文学を志したのは、私塾で漢文やったり養正義塾で法律をやった[1912~13年]ののだが、情緒が欲しくなったのだ。[氏には詩集、随筆集もある]李丙燾氏も法律学んでいたはず。
- ・漢城外国語学校は官立だった。1911年3月卒業予定だったのに1910年の併合で廃止予定となり、早

期卒業になった。生徒には年齢差が大きく、年上の学生は悲憤慷慨していた。この学校は日語部、漢語部、法語部、独語部と英語部の5部があり、私のいた英語部では地理や「算数」まで英語で教えられた。その後、母校などが合併して発足した京城高等普通学校に私は改めて2年編入となったが、教師はすべて日本人で、学生の不満は大きかった。それで1911年、大部分の編入生は3年の1学期だけで退学し、私も同じだった。

- ・父は官吏だったので併合で失職し、ソウルで数年頑張るが落郷した。私は勉強を続けたいので18歳で家出して早稲田の《中学講義録》で勉強した。総督府の臨時土地調査局で整理課の雇員募集に応じて合格した。毛筆で清書する仕事で日給36銭だった。夜間の中東学校に1年間通った。[1915年]後に初代のソウル大総長になられた人格者の崔奎東先生に学んだ。日曜には家にまで行っていろいろ相談に乗っていただいた。
- ・その後、4年制で昼間の中央学校に3年編入して2年間勉学した。周時経の著書を見て語学の勉強をしたくなった。朝鮮語の新しい研究方法を獲得せねばと思った。しかし、金もなく実業会社に就職したりしていたが、梨花女專の講師職にありついていた。講義は日本語でせよと言われ、漢文も日式で教えよとのことで苦勞した。他の韓国人教師も日本語力不足で困っていた。すると何人かは学校から有給のまま2年間、日本に行って学んで来いと言われた。私は日本語は使えたので休職せずずっと勤務していた。すると、9年後に1年休んでもいいというので東京帝国大の大学院に遊学した。指導教授は京城帝大でも指導してもらった小倉進平博士だった。当時、人文系では韓国人学生が4人いた。金寿卿(言語学科)、金桂淑(哲学科)、張厚永(法学科)らだ。学部には金相浹、黃寿永、劉基天、すでに卒業した金史良ら7~8人がいた。
- ・周時経の方法の踏襲ではいけないと思った。日本語に対しての日本人学者の研究方法を調べてみた。
- ・洪命熹：才能もあり、とにかく本をよく読んだ。1万冊読んだともいう。漢籍の記憶力もすごかった。

◎筆者の感想：これほどあちこちの学校等で学んでいる学者は初めてで、驚かされた。その一方で少年期に日本留学はしていない知識人でもある。青年期に経験したことを細かいことまで正確に覚えているのはすごいことである。李先生は耳が遠いようで、こちらの質問の聞き取りに苦労されていて、申し訳なかった。

おわりに

「はじめに」でも述べたように今回取り上げた11名は、これまでに公表したことのない文人を選んだだけということで、体系性があるわけではない。また作家・詩人が多いのに、作品内容や当時の文壇状況などに分け入っての話が不足していることは否めない。これはひとえに我々インタビュアーの勉強不足で、質問そのものが浅かったことを示しているというしかない。それにもかかわらず、ほとんどの文人が率直に、あるいは楽しそうに当時に振り返りながら「裏話」までしてくれたことは本当に得難いことだった。これを公にすることはインタビューから

40年前後の時間が流れ、ご本人たちも世を去られた現在、今後の文学研究のためなどにもそれなりに有意義なことではないかと考えている。

本稿では当時のメモ等を参照しながら、原則として話されたままを記した。事実と違う場合、[]内に筆者が事実について一部は補充したが、煩雑になりすぎることもあり完全ではない。その一方でご本人が勘違いされていても、そのこと自体が貴重な証言と言える側面もあるのではなかろうか。

実は一部の文人（一覧表の20番以降）は、事前了解を取る形で録音がなされている。メモ等と照合しつつ、より詳しいインタビュー内容の再現に努めることも今後の課題である。

また「はじめに」で、筆者はすでに2度ほど11名分を公表していると記したが、そのうちの1篇は謄写版刷りの同人誌に寄せたものなので、ほとんど知られていないであろうし、もう1篇は韓国語で寄稿したものでもあり、いずれも短い随筆調の文章なので、多少書き直すことも考えている。

今回はこれらの課題に向けての作業の一部的な位置付けのもと、書かせてもらった。(了)

文人インタビュー一覧（訪問年月日順）

※以下の参加者名は旧姓を含め、すべて訪問時に基づき、常時参加者は姓のみで表記した。（敬称略）

No. 欄○付数字が今回の対象文人。なお漢字は便宜上すべて略字体で示す。

鴻農映二（東国大）、白川 豊（東国大）、芹川哲世（ソウル大）、水野 健（ソウル大）、

関根春子（延世大） ※（ ）内は当時の留学先大学など。

*1：10月7日に再訪（水野、関根、八重樫愛子）、 *2：11月20日に再訪（白川、関根）

No.	文人名	訪問年月日	インタビュー場所	参加者名
1	朴 鍾和	1980. 7. 24.	文人自宅	鴻農、白川
2	白 鉄	1980. 7. 31.	文人自宅	鴻農、白川、水野
3	尹 興吉	1980. 8. 3.	文人自宅	鴻農、白川、芹川
④	毛 允淑	1980. 8. 21.	韓国 PEN CLUB	鴻農、白川
5	金 素雲	1980. 8. 23.	文人自宅	鴻農、白川、芹川
6	朴 花城	1980. 9. 1.	文人自宅	鴻農、白川、芹川
7	崔 貞熙	1980. 9. 7.	文人自宅	鴻農、白川、芹川、関根
⑧	徐 廷柱	1980. 9. 21.	文人自宅	鴻農、白川、芹川、関根、長友英子
9	金 基鎮	1980. 9. 28.	文人自宅	鴻農、白川、芹川、水野、関根
⑩	尹 一柱	1980. 10. 3.	文人自宅	鴻農、白川、宋友恵
11	俞 鎮午	1980. 10. 5.	文人自宅	鴻農、白川、芹川、関根、長友英子
12	金 光均	1980. 10. 18.	文人自宅	鴻農、白川、芹川、関根
13	李 軒求	1980. 10. 26.	文人自宅	鴻農、白川、芹川、水野、関根
⑭	黄 順元	1980. 11. 2.	文人自宅	鴻農、白川、芹川、水野、関根
15	金 東里・孫 素熙	1980. 12. 8.	文人自宅	鴻農、白川、芹川、水野
⑯	朴 斗鎮	1981. 1. 14.	文人自宅	鴻農、白川、芹川、水野、関根
⑰	鄭 飛石	1981. 5. 7.	文人自宅	鴻農、白川、芹川、水野、関根
18 *1	朴 花城	1981. 9. 18.	文人自宅	白川、牧瀬暁子、車栄子（No. 6 の再訪）
19 *2	李 殷相	1981. 10. 28.	文人自宅	鴻農、白川、芹川、関根、八重樫愛子
20	趙 容万	1981. 11. 25.	文人自宅	鴻農、白川、芹川、関根
⑳	具 常	1981. 12. 21.	文人自宅	鴻農、白川、芹川、関根
22	白 鉄	1985. 1. 24.	文人自宅	芹川、白川（No. 2 の再訪）
㉓	金 松	1985. 1. 27.	ニューソウルホテル	芹川、白川
㉔	柳 呈	1985. 2. 2.	文人自宅	芹川、白川
25	任 軒永	1985. 2. 12.	文人自宅	芹川、白川
26	趙 容万	1985. 2. 21.	文人自宅	芹川、白川（No. 20 の再訪）
㉗	李 丙燾	1985. 3. 2.	文人自宅	芹川、白川
㉘	李 熙昇	1985. 3. 8.	文人自宅	芹川、白川